

「天文通信」を讀みて

天文同好會 水野 千里
岡山支部幹事

歐米諸國には私設の天文臺が所々にあつて望遠鏡が備へ附けられ自由に星を見ることが出来るといふことを聞いて羨望の至りであつたが、昨年三月末京都天文臺に見學に行つたとき、大津石塲の藤井月光亭を訪れ、六時半の望遠鏡を見せて貰つて、我が國に私設の天文臺の出来たのを非常に嬉しく感じたのである。所がいよいよこの天文臺が學術的方面に山本理學士を迎へて活動する様になつたことを衷心から欣喜する者である。

去る二月二日から遊賀日報に連載されつゝある、山本京大助教授述天文通信を日々愛讀して居るが、その書き振りが如何にも平易で天文學の素養なきものが初めて讀んでもなる程と會得せられ、又若干素養ある者が讀んで參考すべき點多く、又専門家といへども是非一讀の價值があると思ふのである。今二分の通信を毎日繰返し讀んで居るさ平易の文にも拘らず深遠なる學理が含まれ、實地觀測の様子が眼前に見え何んさといへぬ、深い深

い天文へと導かれ立つても座つても寝ても醒めても天文通信々々々……の事が我が身を離れず附きまきひ、談話の材料となり、講演の補助となり、研究の指導となり、讀めば讀む程感慨無量である。

今各項に涉つて所感を略述しませう。

一、天文とは何か。

甲、何んの爲めの星視き。

これは天文の總論で星の美なき、星を視くことは人間の自然の心なれば理性の方面、精神の方面のみならず、生活の上にも大切なことを述べられ、

乙、天文の由來

に於て、天文の略史を八千年前バビロンの天文より説き起し、月や太陽の觀測によつて、實用的に用ひられしことや、東西洋の天文の比較、星座の起源、天動説が地動説に變りしことや、大ハーシエルが新天文學の基を開きたることに及び、天文の目的は人間の自然の心を養ふことや、宇宙の不思議を解くことであるさ喝破し、進んで日常生活に役立ちたる主なる事項を列舉し、趣味、學問、實際生活の三點から必要なことを高唱されて居る。

丙、天文の親類筋

として地理、歴史、物理、數學、哲學、宗教及び藝術の各方面と天文との關係密接なることを了解せしめ、殊に精神科學の權威たる哲學は、自然科學の精華たる天文學と相俟つて、始めて完全することを解き、世間に閉却されて居た天文の爲めに氣焰萬丈、拍手喝采せざるを得ないのである。

二、一人前の天文臺。

甲、天文家の柄。

世界の偉人ジョツフル元帥よりか星の方が親しい、星の方が大切な永久の友であるさ絶叫されたのは眞正の天文學者が星を讚美し、自己の天職に忠實なる、恰もマルヌに獨の侵入軍を撃破し、敵の作戦をして大錯誤を來さしめ、それを恢復することを得せしめなかつた、ジョツフル元帥の心事と同一なるので、武も文もその最後は等しく、この一文を讀んで實に痛快に感じたので、軍人はどこ迄も軍人で天文學者はどこまでも天文學者でなくてはならないのである。

乙、望遠鏡

天文と望遠鏡とは生物に食物が必要な様なも

のであるが、大望遠鏡は天候の關係上一年に二、三回しか使へない事があるが、中口徑望遠鏡は動く範圍が非常に多く、肉眼の活動すべき點に至つてはその機會が尙多く、機械は大小によつて精粗の使ひ分けに多大の注意を要するので、望遠鏡と同時に時計の大切なることを述べてある。

丙、緯度と經度

天文臺の位置を精密に觀測して置かなければ折角諸種の觀測にしても勞して功が少いことを述べられ、天測に因つて緯度を一秒の十分の一に即ち地上十五間の十分の一迄迄、精密に觀測せられるといふに至つては、天文は大を説く計りでなく小の小な解くことである事を知らしむるものである。又緯度の變化を述べ、世界中の時計の話、經度の測り方や、月が時計の代用になつたり、無線電信の應用など微に入り細に入り、

丁、天文と氣象

に解き進んで、その境界を明にし一方兩者、相互に助け合ひ始めてその蘊奥を極むることを得、孤立しては完全の域に達せないことは人間社會に於て諸種の階級の者が助け合ふと同様であるのである。

三、藤井天文臺

甲、藤井天文臺の由來。

大正九年末殆んど天文同好會の創立と相前後して藤井社長が六吋半望遠鏡を購入せられ、月光亭に据ゑ付けられてから今日迄の經過を述べられたので、趣味から發足し、學問上に利益を與へられ、實際生活上に裨益を與へつゝあること實に大なるものがある。

乙、藤井望遠鏡 丙、ブツシュ望遠鏡

六吋半望遠鏡が獨逸製でその長所から説き起し、我が國の他の天文臺の望遠鏡にもない特點を數へ、この大に三吋のアツシュ望遠鏡を配し大小相俟つて、其の特長を發揮することゝ述べてある。

丁、精密日時計。

日時計の精密なるものを藤井天文臺に備へ附けてあることが一層この天文臺を價値あらしめて居る。

戊、大津の緯度

今日迄に知られて居る大津の緯度を比較研究し進んで實測の結果、藤井天文臺の位置は北緯三十五度〇分二十一秒五であるといふ結果に達せられし迄の、觀測準備から、その方法

を詳述し讀者をして實際に觀測しつゝあるの感あらしめ、寒氣もその熱心に溫められ、學術に忠實なる其の前には寒暑はないので、特に鉛直線偏差を天體觀測に因つて發見せられた事載せてあふ。

以上が第一回から第二十四回迄の天文通信の概要であるが、これを熟讀玩味するときは言ひ知れぬ快感に打たれ、余は天文通信を切抜き一日に何度となく繙讀しては頗笑みて居るばかりでなく、人々にこの通信を讀み聞かせ、又は談じて天文の眞味を知らしむることに努めて居る。この通信が何を重ぬるに従つて愈々佳境に入つて日々、日報の來るのを樂み早く次が見たくて堪へられない。所謂鵲首して待つて居るのである。柄になき妄評を試みたのも天文愛好生なのであるからどうか許して下さい。

消息

新城教授は本月初め左眼底の外科手術を受けられるため大學病院に入院せられたが月末退院、四月一日には上京して、日本數學物理學會で、セファイ型變光星と、古代東洋の恒星表とについて論文を讀まれる筈。川崎俊一氏(會員、新理學士)は水澤緯度觀測所の觀測技師として、月末赴任。